

# 浪滝遺跡

1990. 3

兵庫県教育委員会

兵庫県文化財調査報告 第80冊

# 浪 滝 遺 跡

1990年3月

兵庫県教育委員会

## 例　　言

1. 本書は、兵庫県城崎郡日高町夏栗8番地に所在する『浪滝遺跡』の埋蔵文化財調査報告書である。
2. 発掘調査ならびに整理作業は、兵庫県土木部豊岡土木事務所の委託を受けて、兵庫県教育委員会が調査主体となり実施した。
3. 発掘調査は、昭和62年度に実施した。調査は、1987年6月11日から同24日までの実働7日間行った。
4. 本書で示す標高値は、豊岡土木事務所設定のB.M.を使用した値で、方位は磁北である。
5. 遺構写真ならびに遺物写真は調査員が撮影した。ただし、図版1の空中写真については国土地理院撮影のものである。
6. 整理作業は、平成元年度に兵庫県埋蔵文化財調査事務所において実施した。
7. 調査は、兵庫県教育委員会　社会教育・文化財課　主任　渡辺　昇が担当した。
8. 執筆は調査担当者が行った。編集は伴　悦子の協力を得て、調査担当者が行った。
9. 実測図は、断面によって器種を分けている。白抜きは弥生土器・土師器、黒塗りは須恵器を表している。
10. 本報告にかかる出土遺物ならびにスライドなどの資料は、現在兵庫県埋蔵文化財調査事務所（神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5）ならびに兵庫県教育委員会魚住分館（明石市魚住町清水立合池の下630-1）で保管している。

## 本文目次

I.はじめに	
1. 調査に至る経緯	1
2. 発掘調査の経過	2
3. 整理作業の経過	3
II.位置と環境	4
III.調査結果	
1. 位置	11
2. 調査の方法	11
3. 確認調査の結果	12
4. 焼土壙	14
IV.出土遺物	
1. 弥生時代の遺物	17
2. 古墳時代の遺物	18
3. 奈良・平安時代の遺物	19
① 土師器	
② 須恵器	
③ 砥石	
V.おわりに	29

## 挿図目次

第1図	浪滝遺跡遠景	1
第2図	調査風景	2
第3図	発掘整理作業風景	3
第4図	開通後の久斗バイパス	3
第5図	持鍋山遺跡	4
第6図	久田谷遺跡 銅鐸推定復原図	5
第7図	浪滝遺跡の位置と周辺の遺跡	6
第8図	久田谷遺跡 採集土器	7
第9図	橋縫1号墳	8

第10図	岩倉4号墳	9
第11図	但馬国分寺塔跡	9
第12図	浪滝遺跡の位置	11
第13図	トレント配置図と全面調査の範囲	12
第14図	土層断面図	13
第15図	確認調査土層図	14
第16図	焼土壤実測図	15
第17図	焼土壤堆積状況	16
第18図	弥生時代前期の土器実測図	17
第19図	古墳時代の土器実測図	18
第20図	土師器実測図(1)	20
第21図	土師器実測図(2) (焼土壤出土)	21
第22図	土師器実測図(3) (焼土壤出土)	22
第23図	土師器実測図(4)	23
第24図	土師器実測図(5)	24
第25図	甌実測図	25
第26図	須恵器実測図(1) (焼土壤出土)	26
第27図	須恵器実測図(2)	27
第28図	砥石実測図	28
第29図	砥石	28
第30図	浪滝遺跡の現況	30

## 図版目次

- 図版1 浪滝遺跡周辺空中写真 (国土地理院撮影)  
 図版2 (上) 浪滝遺跡 遠景  
       (下) 浪滝遺跡 全景  
 図版3 (上) 浪滝遺跡 遠景  
       (下) 調査区 全景  
 図版4 (左上) 確認調査地 全景  
       (左下) トレント2 北壁  
       (右上) トレント1 東壁  
       (右下) トレント1 東壁

- 図版5 (上) 焼土壤 断面  
(下) 焼土壤 土器出土状態
- 図版6 (上) 焼土壤 全景  
(下) 焼土壤 全景
- 図版7 (上) 弥生前期の土器  
(下) 確認調査出土土器
- 図版8 出土土師器(1)
- 図版9 出土土師器(2)
- 図版10 出土土師器(3)
- 図版11 出土土師器(4)
- 図版12 出土須恵器



日高町の位置

## I. はじめに

### 1. 調査に至る経緯

浪滝遺跡は、<sup>なみたき</sup>城崎郡日高町夏栗に所在する遺跡で、県道出石村岡線バイパスである久斗バイ<sup>くと</sup>バス建設に伴って調査を実施した。分布調査などでは確認されなかった遺跡で、工事によって不時発見された遺跡である。法面削平時に地元在住の井垣慶一氏によって須恵器などが採集されたことによって存在が確認されたものである。そのため、急遽確認調査を実施することとなった。その確認調査の結果によって、調査の方法を協議することとなった。

県道出石村岡線は、神鍋山方面から東進し、日高町市街地内の江原で国道312号線と合流する。合流部分を中心とする日高町中心地は、行楽期などに渋滞することが多々ある。それを解消するために計画されたバイパスである。また、県道出石村岡線は集落内を結ぶように通っているが、集落内は道幅が狭いところが多く、学童・生徒の自転車などの通学路になっていることからも安全面の検討が必要となっていた。そのためにも、バイパス計画は必要な課題となっていた。これら諸条件の必要性から施行されることとなった。

バイパスは、日高町久田谷で現在の県道と分かれ、現道と北側山塊とのほぼ中央の水田部分を東進し、久斗山をトンネルで通過するものである。周辺の水田地域も農業基盤整備が行われていることから、分布調査が行われている。部分的に確認調査も実施されている。調査区西側でも10片近くの土器が採集されている地点（水田）があり、遺跡の存在する可能性は考えられていた。また、調査区の西方約900mのところで銅鐸（久田谷鐸）が出土し、夏栗集落の北側からは埋納された古錢が多量に出土した、まが谷遺跡が立地しており、周辺が古代から開けていた地域であることが窺われることから、遺跡の存在は十分に予想された。

このような状況で不時発見された遺跡であるが、関係者・機関の協力を得られ、調査が実施されることとなった。最小限の調査とはいえ、調査を実施出来たことは幸いであった。遺跡を見発見戴いた井垣氏ならびに豊岡土木事務所・川嶋工務店の関係者に謝意を表します。



第1図　浪滝遺跡遠景

## 2. 発掘調査の経過

不時発見の遺跡であることから、早急な対応が迫られた。そのため、6月6日に遺跡確認が日高町教育委員会に連絡され、引き続き協議が行われた。そして、翌週の6月11日に確認調査を実施した。1日の予定で確認調査を行ったところ、遺物包含層が確認された。しかし、小面積の調査であることから、引き続き85m<sup>2</sup>の全面調査を6月16日から行うこととなった。

確認調査は、元の地形の残っている法面部分に最初に南北方向のトレンチ（1トレンチ）を設定した。その結果、遺構面は確認されなかったものの、南半で須恵器・土師器を含む遺物包含層が検出された。そのため、その広がりを確認するために東西方向にトレンチ（2トレンチ）を追加設定した。さらに、西側の水田部分にも2本のトレンチを設定して確認を行った。包含層とともに、焼土の混ざった土壤を検出したので、兵庫県教育委員会と豊岡土木事務所とで協議を行い、遺構が存在する部分約85m<sup>2</sup>について全面調査を実施することになった。

全面調査は、翌週の6月16～18日の3日間行った。延べ27人の地元の方々の協力を得て、調査を行った。

### 調査の組織

発掘調査・整理作業とともに兵庫県土木部豊岡土木事務所の委託を受けて、兵庫県教育委員会が調査主体となり、調査を実施した。

#### 調査事務　社会教育・文化財課

課長　北村幸久

文化財担当参事　森崎理一

副課長　黒田賛一郎

課長補佐　福田至宏

課長補佐兼

埋蔵文化財調査係長　大村敬通

主査　井守徳男

#### 調査担当

主任　渡辺昇

調査参加者　浅田房一・麻木昌二

井垣慶一・永井莊一

成田光夫・西村克巳

前田金次



第2図 発掘調査風景

### 3. 整理作業の経過

整理作業は、平成元年度に兵庫県埋蔵文化財調査事務所において実施した。水洗い作業から報告書刊行までのすべての作業を行った。

#### 調査の組織

調査事務 兵庫県埋蔵文化財調査事務所

所長 大江 剛

副所長 兼 村上 紘揚

調査第二課長 小池 英隆

総務課長 松下 勝

整理普及課長 岸本 一宏

#### 調査担当

主任 渡辺 昇

嘱託員 伴 悅子

タ 八木 和子

タ 前田 陽子

タ 長浜 幸子

タ 吉本 佳恵



第3図 整理作業風景



第4図 開通後の久斗バイパス

## II. 位置と環境

浪滝遺跡は、兵庫県城崎郡日高町夏栗字浪滝8番地に所在する遺跡である。浪滝遺跡の所在する日高町は、国分寺・国分尼寺ならびに第二次但馬国府の存在する町で他にも古代を中心として遺跡の多いところである。円山川の中流域およびその支流である稻葉川流域を中心として開拓された谷部が開けており、そこを主な生活の場としている。稻葉川が円山川に注ぎ込む北側平野部に国分寺は造営され、また現在の町の中心地も合流点周辺である。

円山川は但馬第一の河川で、朝来郡に源を発して日本海に注ぐ全長約60kmの一級河川で、但馬の主要地域をほぼ貫いている。換言すれば、円山川およびその支流を中心として文化が発達したとも言える状態である。稻葉川も円山川の一支流であり、独自の文化を形成した地域である。稻葉川は、美方郡との境界である蘇武岳などの山塊を源としており、現在はスキー場はじめとするレジャー施設として知られているが、神奈備山である神鍋山の裾を巡り、山間部をやや急な流れとして南東方向に流れ、阿瀬渓谷との合流する付近から流れを東方向に変え、比較的緩やかな流れとなって浪滝遺跡の立地する谷の南側を流れ、そして円山川へと注いでいる。この付近（西側の久田谷から合流点の宵田まで）が、稻葉川流域では平坦な水田地域となっている。

最も古い段階の遺跡は、神鍋山北麓の神鍋山遺跡と、稻葉川と知見川の合流する付近の伊府遺跡である。縄文時代草創期からの遺物が出土している。2遺跡ともに尖頭器が出土しており、さらに古い旧石器時代の遺物の出土が期待される。草創期の尖頭器文化から晩期の突芯土器まで出土しており、引き続き弥生前期の土器も出土している遺跡である。兵庫県の縄文期研究の礪矢となった遺跡で、全時期を通しての大量の遺物や各地からの搬入土器そして前期の住居や貯蔵穴・配石遺構などが確認されている。発掘調査が一部では行われているものの、地元研究者の和田長治氏の努力によるところが大きい状態である。今後、遺跡解明の調査を行われると新たな事実がわかるものと期待される。

神鍋山遺跡東南東約2kmの稻葉川下流の山の宮遺跡でも古い段階の爪形文の土器から出土している。山の宮遺跡も一部調査が行われたものの、遺跡の空白部分を調査したようで、



第5図 神鍋山遺跡

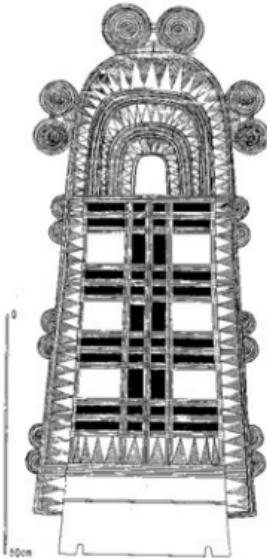
遺物の大半は採集されたものである。草創期から後期までの土器が見られる。山の宮遺跡の南東の前田遺跡でも早期の石鏡などが採集されている。さらに下流の姫谷遺跡では抉状耳飾が1点出土している、今までの3遺跡が丘陵上に立地しているのに対して、平地に立地している。多量の人形・斎車などの祭祀遺物が出土したことで知られる遺跡であるが、精巧な抉状耳飾で、直径3.9cmの乳白色を呈した優品である。稻葉川の支流である知見川・觀音寺川によって開析された谷にも2遺跡が存在している。伊府遺跡と森山遺跡で、ともに縄文時代から弥生時代そして後世へと続いている遺跡である。伊府遺跡は、尖頭器・局部磨製石斧など草創期の石器群が出土しており注目される。県下でも尖頭器の出土は増加しているものの、伊府遺跡と神鍋山遺跡の稻葉川流域と、ハチ高原遺跡・杉ヶ沢遺跡・上山遺跡などの高原に位置する遺跡が主体であり、さらに草創期の土器（ネガティブ文・撲糸文）を伴っていることが資料価値が高いものと思われる。

日高町の中心地である平野部にも襦布ケ森東遺跡・襦布ケ森西遺跡・焼ヶ辻遺跡が位置し、その北側に水上遺跡が位置している。現時点では遺溝は確認されていないが、早期から晩期までの土器が確認されている。襦布ケ森東遺跡では、土器の出土は少ないものの敲石や磨石が多量に出土していることが注目される。

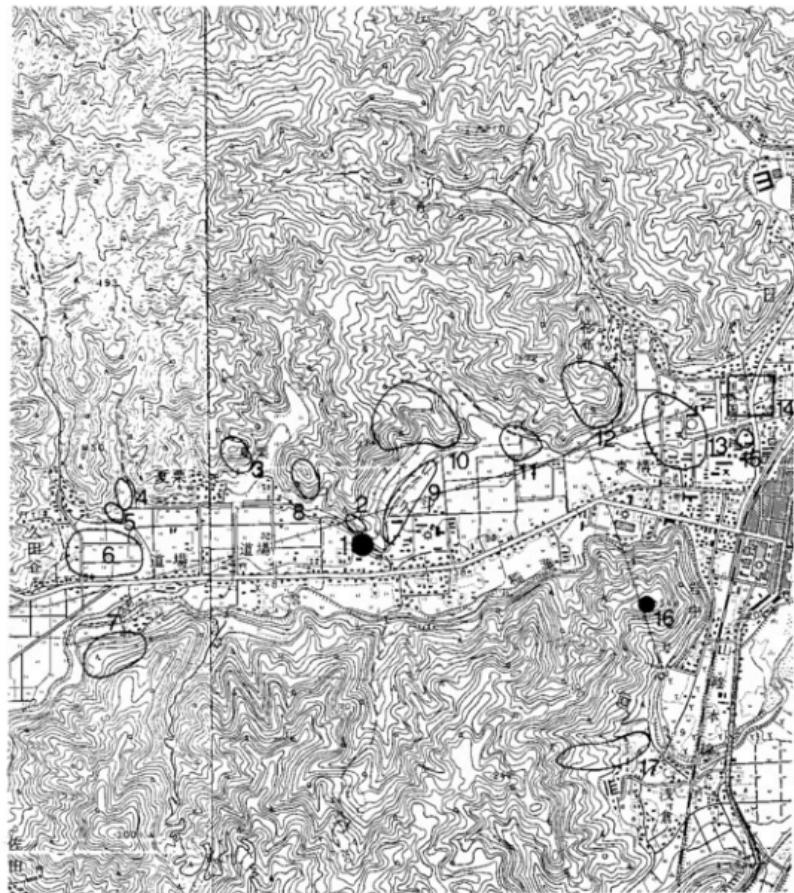
弥生時代になっても遺跡分布の上で大きな変化はない。最近遺跡は増加しているものの縄文時代に比べると逆に知られている遺跡数は今のところ少ないようである。日高町の縄文時代の遺跡が多いとも言えるかもしれない。前期の遺跡は、縄文時代の遺跡と同様である。縄文晩期の土器を出土している神鍋山遺跡・森山遺跡・襦布ケ森東遺跡で続いて弥生時代の土器が確認されている。浪瀬遺跡は、それらの遺跡とは異なり弥生時代になって始めて生活を営み始める遺跡である。西側の久田谷遺跡も同様である。出土点数も少量で、遺溝は検出されていない。

中期になっても遺跡数はほとんど変化しない。南矢代田遺跡などが加わった程度である。大半が中期末に近い時期で中期前半の遺物は見られず、不分明な点が多い。

後期になると遺跡数は増加する。町内各地から後期の土器が出土している。土器の内容も一変し、山陽色の強い土器が出土している。前記した襦布ケ森東遺跡・南矢代田遺跡で多量の後期の土器が出土しており、こ



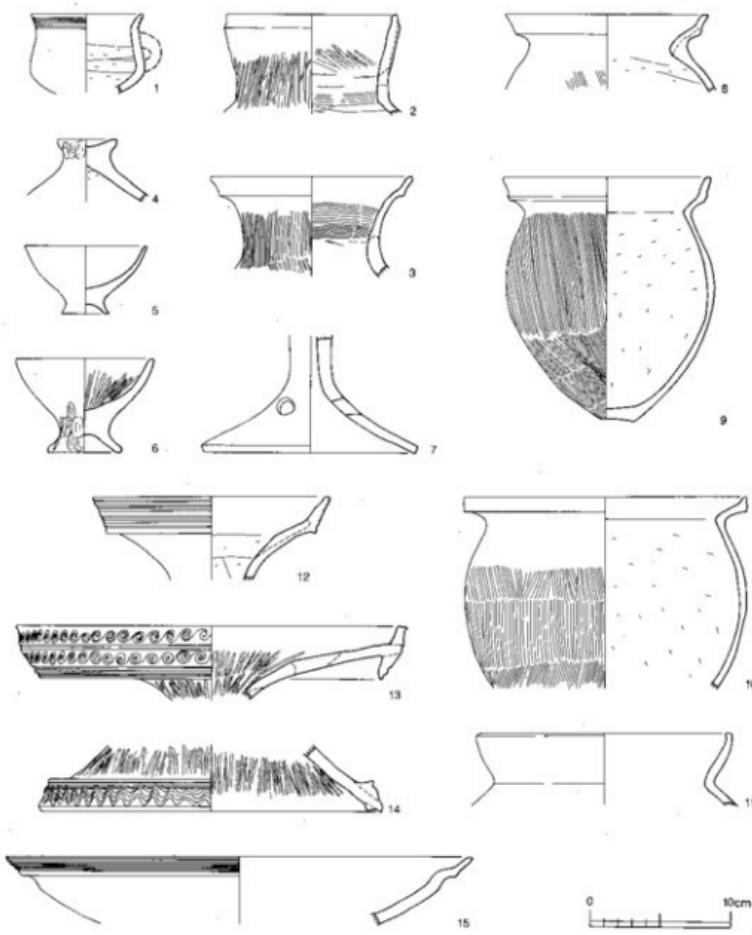
第6図 久田谷遺跡銅鐸推定復原図  
(「久田谷遺跡」から)



第7図 濱滝道路の位置と周辺の遺跡

- |            |              |           |            |
|------------|--------------|-----------|------------|
| 1. 濱滝遺跡    | 2. 下ケ谷古墳群    | 3. 山王山古墳群 | 4. まが谷遺跡   |
| 5. 稲岡古墳群   | 6. 久田谷遺跡     | 7. 市場古墳群  | 8. 夏栗古墳群   |
| 9. 久斗遺跡    | 10. 郡是ウラ山古墳群 | 11. 定谷遺跡  | 12. 国友谷古墳群 |
| 13. 播磨ヶ森遺跡 | 14. 但馬国分僧寺   | 15. 焼ヶ辻遺跡 | 16. 宵田城跡   |
| 17. 大谷古墳群  |              |           |            |

の時期の細分も可能になっている。この時期に注目されるものは、久田谷遺跡の銅鐸であろう。突線鉈V式の大型の銅鐸が小片に破碎されたもので、出土例の少ないものである。銅鐸の破片の割れ口は古く埋納もしくは廃棄時に破碎されたものと考えられる。ただ、切り離した痕跡は



第8図 久田谷遺跡採集土器

認められない。周辺からは後期から古墳時代前期にわたる遺物が出土している。

日高町の古墳のほとんどが後期のものである。豊岡市妙楽寺墳墓群のように弥生時代から古墳時代にかけての墓制を示す遺跡は確認されていない。ただ、西紀小学校裏山で古墳時代前期の壺などが出土しており、この時代の墳墓の可能性が考えられている。西紀小学校裏山墳墓群以外には前期に遡る古墳は確認されていない。中期になっても鶴岡の馬場ヶ先古墳、水上の羽根山古墳の2基が確認されているだけである。ともに工事に伴って確認されたもので現存しないことが惜しまれる。馬場ヶ先古墳は、平地に位置する数少ない古墳で、河原石を使って溝築された全長2.6mの竪穴式石室である。山陽系の二重口縁の壺と埴輪、玉類、鉄刀、鉄剣、鏡が出土している。また、上層に経塚が築かれており、陶製経筒と和鏡も出土している。羽根山古墳はH状に築かれた組み合わせ式の箱式石棺であることから5世紀半ばより古い時期と考えられよう。

上述した3基以外は後期の古墳である。古墳の分布は今までの遺跡が存在したところは当然のこととして、今まで遺跡が築かれていなかった円山川右岸の丘陵部にも多数の古墳が溝築されている。特に、多田屋川沿いに築かれた4基以上から成る樋縫古墳群の盟主墳である1号墳（樋縫古墳）は、全長13mを測る大型の横穴式石室を主体部とする径29m、高さ5mの大型の円墳である。石室はほぼ完全に残っている典型的な横穴式石室である。出土遺物も豊富である。但馬を代表する横穴式石室の1つである。6世紀末に築造された古墳であるが、後世まで利用されているようである。次の律令期に当地周辺が中心へとなるための胎動を感じさせる古墳である。

典型的な後期の群集墳としては神鍋山南麓に位置する岩倉古墳群が挙げられる。現在のところ30基の円墳が確認されており、そのうち分布状況などが明らかかな1～19号墳は、その立地から3グループに分けられる。1基の小竪穴式石室が混在しているが、他は横穴式石室を主体部としている。3号墳は最も規模が大きく全長9.3mの片袖式の横穴式石室で盟主墳と考えられる。馬具をはじめ須恵器・管玉・鉄鏃が出土している。また、興味ある古墳として十二所神社古墳がある。横穴式石室の見上げ石に線刻の装飾が施されている。ジゲリ谷古墳群が16基、訓原古墳群が10基、市場古墳群が11基確認されているが、他の古墳群は2～5基で形成されるものが多いようである。ただ、横穴式石室を主体部としない但馬特有の小墳丘の尾根上に溝築される古墳群は多数あり、まだまだ未確認の古墳群も含めて増加するものと思われる。

須恵器の窯跡も5ヶ所で確認されている。調査が行われたのは、中に所在する宮ノ谷窯跡だ



第9回 樋縫1号墳

けである。7世紀はじめの窯と考えられている。伝えられている土器には6世紀末の土器もあり、町内の他の窯跡からも6世紀末の土器が採集されているので、この時期から焼窯されたものと思われる。

律令時代になると、但馬国分寺・但馬国分尼寺・但馬国府が日高町内に存在していることから、政治的な但馬の中心地へと変化していく。

但馬国分寺は、昭和48年から3ヶ年寺域確認調査を行い、伽藍配置などが明らかになっている。塔・金堂・中門を調査し、寺域と東と南の端を検出している。また、その後の調査で南東隅を確認し、多量の木簡が出土している。国分寺西側約700mには櫛布ケ森西遺跡が立地し、井戸などの遺構とともに多くの遺物が出土している。特に綠釉陶器が多数出土しており、官衙遺構と思われる。但馬国分尼寺は、国分寺の北1kmにあり、4個の礎石が残されている。安政年間においては26個の礎石が存在したようである。

但馬国府は、「日本後紀」の延暦23年の項に「國治を氣多郡高田郷に遷す」とあり、2時期の国府がある特殊な例である。第2次国府は文献に記されているように日高町松岡・水上一帯の旧高田郷で確認されている。深田遺跡・カナゲダ遺跡・川岸遺跡などが国府推定域に位置し、国府を想定させる遺物が出土している。木簡をはじめ、木履・檜扇・帶金具・墨書き土器など国



第10図 岩倉4号墳



第11図 但馬国分寺 塔跡

府として考えるのに十分な遺物内容である。祭祀遺物も人形・馬形・斎串が出土しており、祓所と想定されている。祓所と考えられる遺跡は、野に位置する姫谷遺跡がある。やはり人形・馬形・斎串が出土しており、浪滝遺跡の西側1.2kmと稻葉川上流にあり、離れたところで祓いを行う典型例であろう。2ヶ所の遺跡で土器内に古錢が埋納されていた。久斗では杯内から神功開寶が觀音寺では蓋をした壺から和同開珎が検出されている。浪滝遺跡はこのような時代に営まれた遺跡である。但馬の中心地の西側の狭い地域に相当する。時代は下がるが、浪滝遺跡西側の竹林のまが谷遺跡からは多量の錢を埋納した壺が出土している。

和名抄によると、当遺跡周辺は但馬国城崎郡日置郷に属していたようである。

### III. 調査結果

#### 1. 位置

浪滻遺跡は、稲葉川によって開拓された谷の北側に立地する遺跡で、丘陵との地形交換線上に位置している。稲葉川は知見川と合流する伊府付近から流れが緩やかとなり、比較的面積の広い平坦な水田を形成している。そして円山川合流地点まで同様の谷となっているが、浪滻遺跡の立地する部分だけ尾根が南に張り出し、谷を東西に分けている。その尾根の突端には兵主神社が鎮座している。尾根は、東南東に延びており、比較的急峻な尾根でその西側斜面に浪滻遺跡は立地している。

#### 2. 調査の方法

浪滻遺跡は、遺跡の確認が不時発見によるものであることから、一般的な調査とは方法を異にしている。まず、遺跡の広がりを把握するために確認調査から実施した。遺物を探集した地点を中心にトレンチを設定した。当初は、普通の遺跡調査と同様に $2 \times 2$ mの坪を設定して確



第12図 浪滻遺跡の位置

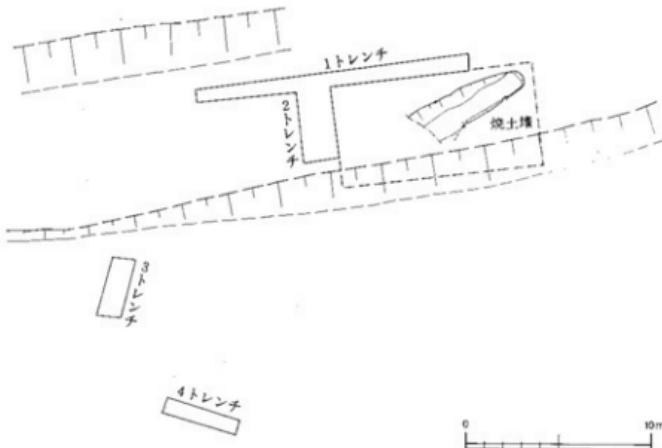
認する予定であったが、すでに遺物包含層は残っておらず、部分的に工事の際に深く掘り下げられていた。そのため、土層の観察をする上に坪掘り調査では不十分であろうと判断したことから、トレンチ調査に切り替えることにした。トレンチは2本設定した。最初にコンターラインに平行に1トレンチを設定し、土層の堆積状況や遺構の有無・包含層の広がりを確認したことから、包含層の厚い部分に直交方向に2トレンチを設定し、さらに包含層の広がりを確定することが出来た。

また、トレンチ調査によって当初予測していなかった弥生時代前期の遺物を検出したので、その時期の遺跡の広がりも知る必要性が生じてきた。そのため、西側の標高の低い水田を対象として重機によって確認トレンチを2ヶ所設定した。しかし、弥生時代の遺構・包含層は認められず、遺物も検出出来なかつたので、この時期については調査は終了した。

重機による確認調査も含めて4本のトレンチ調査の結果、遺構面の存在と包含層の広がりを確認出来たので、その部分について全面調査が必要と考えられた。1・2トレンチに囲まれた南西部で、約85m<sup>2</sup>について引続き全面調査を実施することとした。

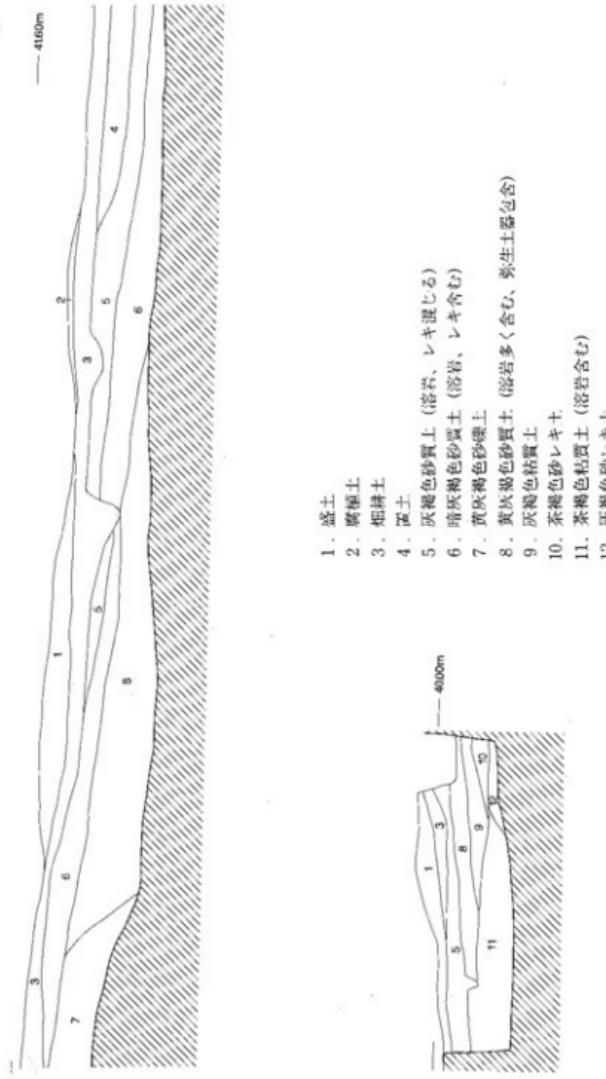
### 3. 確認調査の結果

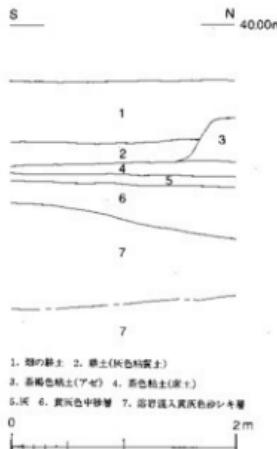
確認調査はトレンチ調査によって行った。4本のトレンチを設定して(第13図)確認調査を実施した。1トレンチは遺物採集地点を中心に等高線に平行に15m設定したものである。北側では地山である溶岩流を含む黄灰褐色砂礫土が耕土直下で現れており、2mくらいから深く潜



第13図 トレンチ配置図と全面調査の範囲

第14図 土層断面図





第15図 確認調査土層図

した1筆の水田はほぼ水平な堆積を示していることが確認された。さらに包含層中から弥生時代前期の土器が出土した。その結果、西側の標高の低い部分を対象として確認調査を追加することとなった。

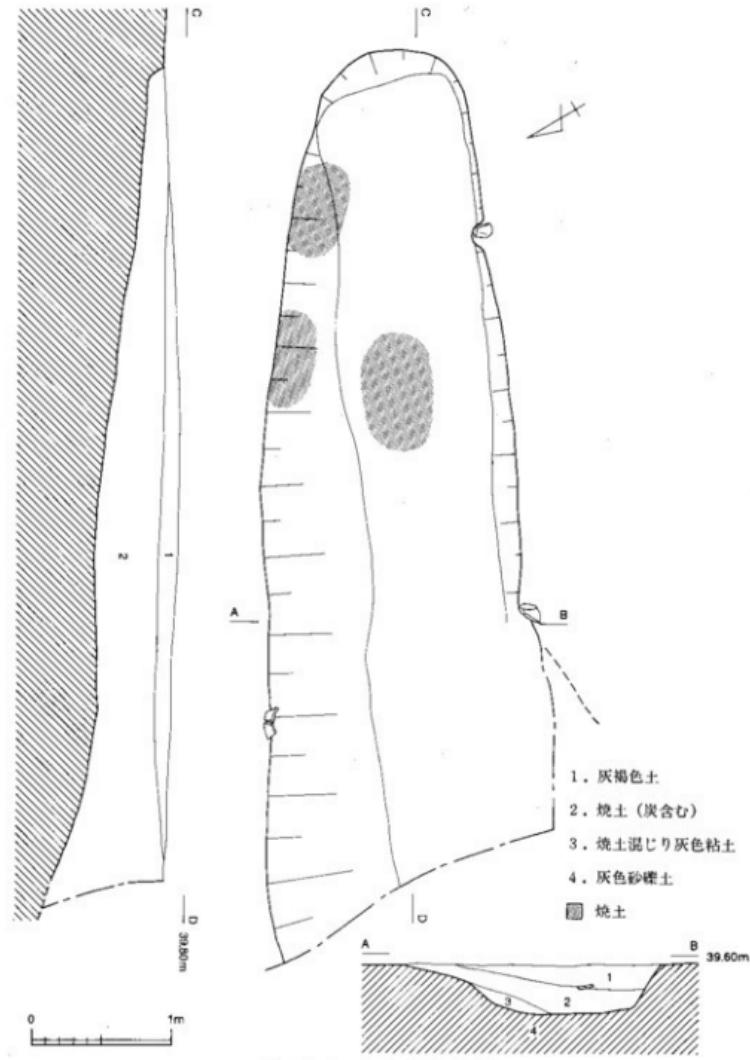
標高の低い西側の水田に設定した3・4トレンチは、ともに遺構面となるような面は存在しなかった。現在の耕土の下に時期不明（近代？）の水田土壤と一部その大畦畔を確認しただけで、その下は砂層と粘土層であった。少量の奈良時代の土器が流れてきていたが、包含層は認められず浪濱遺跡が広がっている可能性は考えられない。

#### 4. 焼土壤

調査によって確認された遺構は焼土壤1基だけである。他には遺物包含層を確認しただけである。今回調査した部分が残存している浪濱遺跡のほぼ全域に相当するものと思われる。

焼土壤は1・2トレンチに囲まれた南西部分で検出している。幅約1.8mで長さは6.1mを測る。主軸はN28°Wで、東側尾根の等高線にはほぼ平行である。尾根は1トレンチ北側付近からやや東に屈曲しており、屈曲した尾根南側の等高線と平行である。西側は畑に耕作などによつて削平されており、全体像は不明である。ただ、あと僅かで終結するものと予想される。

側壁の状況は南側がほぼ直立に近い斜面で、北側は緩やかな斜面となっている。特に、残存部近くの西端になると全体的に南側に流れるように緩やかになっている。東側の先端と思われる縫部は0.3mと浅いがやや急である。縫断の形状は、先端から1.5mまでの部分の底面はほとんど平坦で水平である。そして緩やかに下がり始め、先端から約3.0mのところで深くなり舟



第16図 焼土 塚 実測図

底状を呈して約1.0m緩やかに浅くなり、そこから急に深く下がっている。窯体と考えられる東側部分に焼土は多く見られた。

焼土壙内からは多数の遺物が出土している。当然2次焼成を受けているものも含まれている。須恵器・土師器とともに出土しているが、土師器の方が量的には多かった。出土位置は灰層と東側先端部に近いところから多数出土している。東側先端部近くは鍋の出土が多かった。須恵器は量的に少ないものの、壙内から確実に出土している。

西側の低い方には灰・炭・焼土・土器片を含む層が延びている。あたかも窯の灰原の状況と同じである。遺構面では火を使用したことは歴然であり、火に関連する遺構であることは明らかである。

一部時代の漸る遺物もあるものの大半は奈良時代の遺物である。そのことから、焼土壙の時期は奈良時代と当然考えられる。此の時期としては、焼成遺構と呼ばれる遺構が検出されているが同様の遺構とも考えられるが、須恵器を含んでいることや2次焼成を受けている土器と受けていない土器があることから、火に関連した遺構であるが、弥生時代に見られる屋外炉に近い遺構であろうと考えている。



第17図 焼土壙推積状況

## IV. 出 土 遺 物

出土遺物は、時代でいうと弥生時代前期から奈良時代末までのものが見られる。種別で分けると、弥生土器・土師器・須恵器・石器に分けられる。ここでは、時代順に分けて報告する。

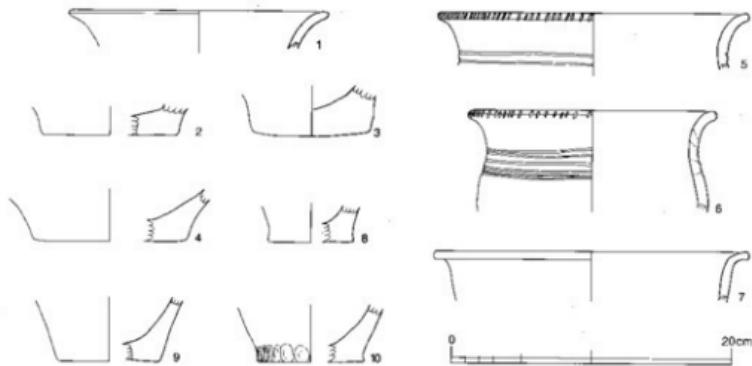
### 1. 弥 生 時 代 の 遺 物 [(1) ~ (10)]

弥生時代の遺物は土器に限られる。前期と後期末から古墳時代にかけての土器が出土している。しかし、小片が多いこともあるが、後期末から古墳時代にかけての時期の土器はいずれの時代に入るか明確ではない。総体的には古墳時代の範疇に入るものと思われる。一部弥生時代末の土器も含まれているかもしれないが、一括して古墳時代で扱うものとする。

弥生時代前期の遺物も少量である。図化した土器は10点である。他にヘラ焼き沈線の残った土器片もあるが、個体数として図化した土器の数と大差ない数と思われる。

出土土器の中では、壺と甕の器種しか認められない。図化した内訳は、壺4点・甕6点である。全体的に器面は磨滅している。色調は、赤褐色から黄褐色のものが多く、器内は黒っぽいものもある。すべて長石・チャート・酸化鉄などの小石粒～砂粒を比較的多く含んでいる。

(1)~(4)は壺である。(1)は口縁部で、他は底部である。(1)は復原口径18.4cm、残存高2.7cmを測り内面に二次焼成の痕跡が窺える。(3)は歪な底部で底が厚い大型品である。(4)は丁寧に仕上げられたもので、時期が他よりもやや下るかもしれない。



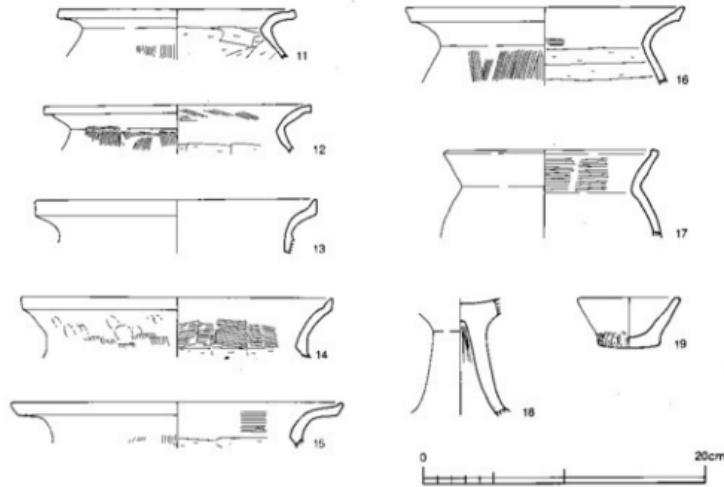
第18図 弥生時代前期の土器実測図

(5)～(10)は壺であろう。破片が小さいため鉢になるものもあるかもしれないが、ここでは壺として報告する。(5)～(7)は口縁部で、(5)(6)は口唇面にヘラによる刻目が施され、頭部下にヘラ描きの沈線が見られる。(5)には2条、(6)には6条の沈線文が見られる。(6)の沈線は上の2条と下の2条には施文時の継ぎ目が看取され、1対になっていたことが想像される。施文原体が半截竹管の可能性がある。ただ、中央の2条が不整然であることが断定しかねる点である。復原口径は、(5)が22.0cm、(6)が17.6cm、(7)が22.4cmを測る。

## 2. 古墳時代の遺物 [(11)～(19)]

古墳時代の遺物と断定出来る土器は少量である。種別としては土師器と須恵器があるが、須恵器は固化出来るものはない。土師器は時期的に開きがあり、前期のものから後期のものまで時期幅があるようである。後期の壺は奈良時代のものと分別が出来なかったので、後節で扱っている。また、古墳時代の土師器の可能性があるが、便宜的に後節に位置づけているものもあるが、断定出来ない資料である。

器種には壺・鉢・高杯がある。(11)～(17)は壺で、すべて口縁部である。この時期の確実な底部は抽出出来なかった。7点とも前期の壺であるが、併だけ僅かに新しい時期のものである。布留系統の壺で、内面に特徴的な肥厚が見られる。ほぼ直線的に延びる口縁部からやや甘い稜線



第19図 古墳時代の土器実測図

を持って胴部へと続いている。胴部は上部しか残っていないが、球形になろうかと思われる。口縁部内面はハケ整形のヨコナデで仕上げている。

(1)～(6)は、(7)より一段階古いもので、(1)(2)はくの字口縁であるが、搬入品ではない。端面はともに方形になっている。成形技法も同様で、内面はハラケズリ、外縁はハケ整形で、口縁部はヨコナデで仕上げている。(3)は口縁部内面を断続的なハケ整形を行っている。(3)～(6)は口縁端部をつまみ上げて肥厚させるもので、但馬地域に多いタイプである。

壺以外の器種は高杯・鉢を1点ずつ図化している。(8)は高杯の柱状部で、端部はいずれも残っていない。そのため透孔の有無も不明である。内面には絞り目が見られる。淡赤褐色を呈しており、焼成は良好である。外縁はハラ状工具で成形し、ナデで仕上げたようである。(9)は小型の鉢で、ほぼ完存していた。底部は再成形で平滑である。指頭圧痕が明瞭に残っている。口縁端部周辺だけヨコナデを施しているが、他はナデで仕上げている。やや大きい石粒を含み、器表は茶褐色、器肉は黒褐色である。手捏ねに近い製品である。

### 3. 奈良・平安時代の遺物 [(20)～(98)]

浪湧遺跡出土遺物の大半がこの時期の遺物である。土師器・須恵器・石器の種類の遺物が出土している。土師器には古墳時代のものも一部含まれている可能性があるが、明らかに分類出来なかったからで、当節で扱うこととする。図化した遺物98点のうち79点が奈良・平安時代の遺物である。

また、唯一の遺構である焼土壙出土遺物が多数を占めている。79点のうち焼土壙出土遺物は44点である。

#### ①土 節 器 [(20)～(69)]

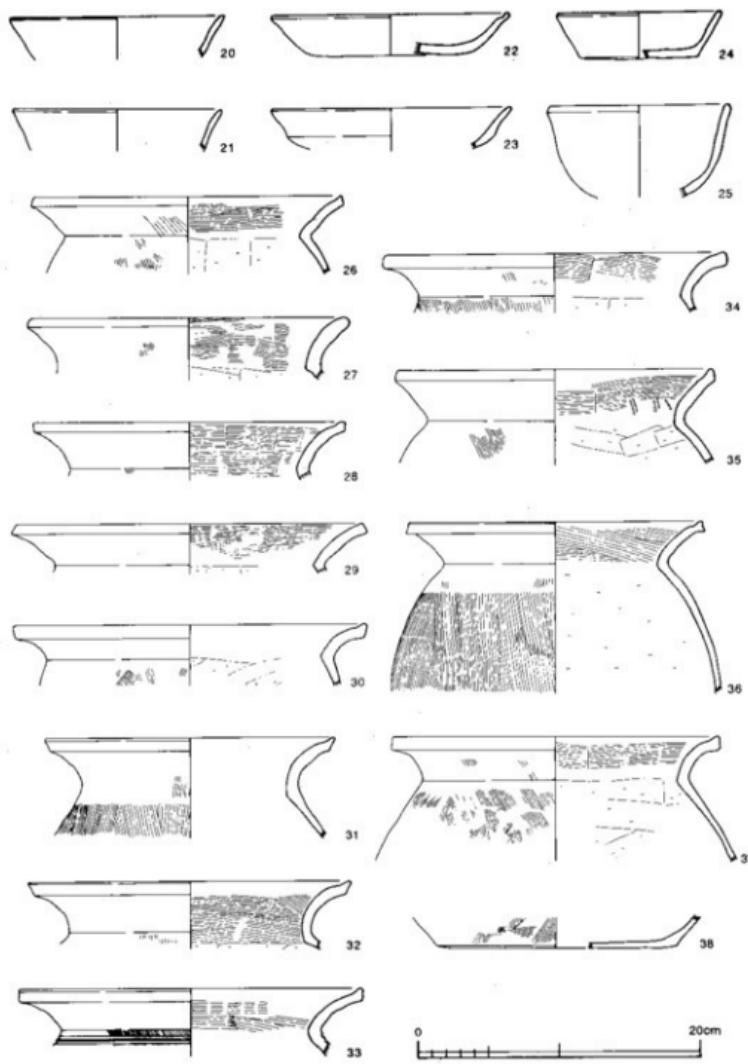
土師器の出土量が最も多い。器種は杯・鉢・壺・鍋・竈である。図化したものは壺が最も多く24点で、次に鍋が13点で以下竈・杯・鉢の順である。

#### 杯 [(20)～(24)]

5点出土している。すべて焼土壙内からの出土である。(20)～(23)は口径15～17mmの杯であるが、口縁端部や外形に異なりがある。(22)だけ端部をヨコナデによってつまみ上げ、内面に窪みを持っている。(23)は外面に稜を持っています。(21)は精選された胎土を用いた杯で、焼成も良好である。朱を塗布した痕跡が見られる。(24)は他の杯と比べてやや小型である。口径11.2cmを測り、器高は3.3cmである。底部はヘラによって切り離されている。体部はヨコナデで仕上げている。

#### 鉢 [(25)]

(25)1点だけの出土である。手捏ね風のやや粗い作りである。口径12.4cm、残存高6.5cmを測る。内面はすべてヨコナデで仕上げているが、外縁は口縁部のみで下半はハラケズリののちナデ調整を行っている。黒斑が見られる。砂粒を含み、色調は茶褐色である。(38)は器種を断



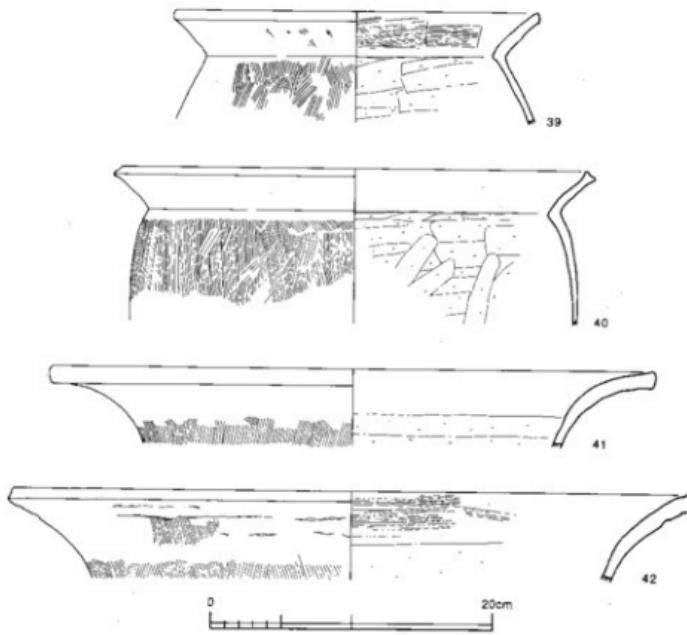
第20図 土師器実測図(1)

定出来ないが、大型の鉢の底部の可能性もある。

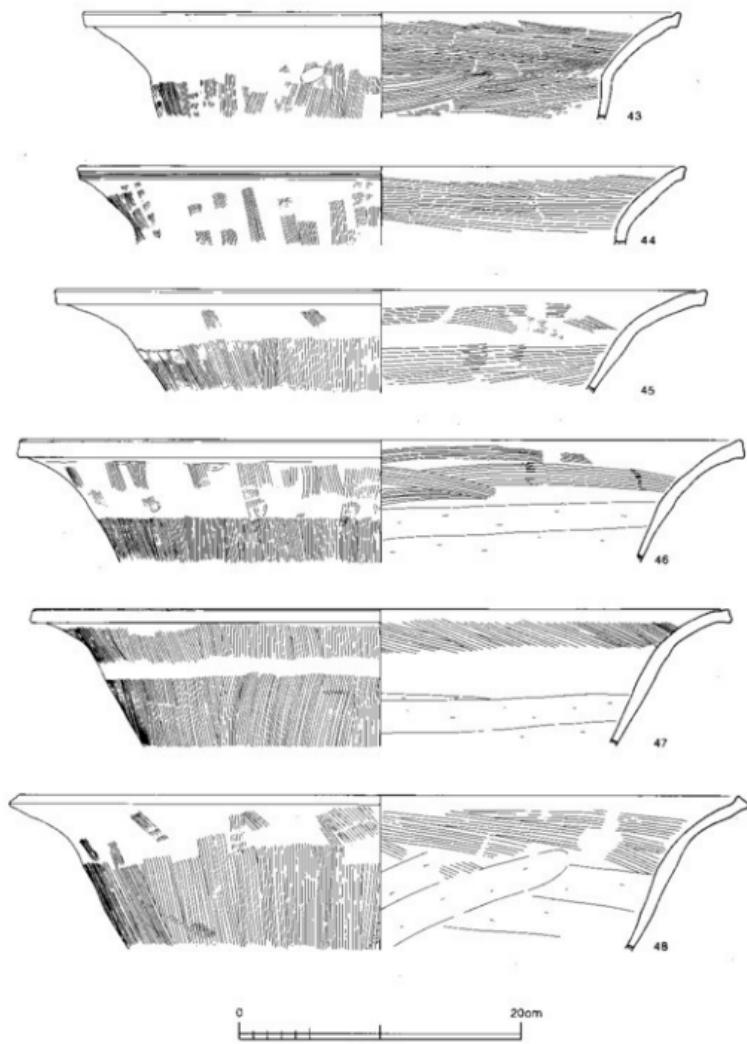
甕 [(26)～(40)(49)～(58)]

甕は造構の内外から出土している。一応くの字形の口縁部であるが、数点端部をつまみ上げるものがあり、これが古墳時代の土器の可能性も考えられる。(26)～(40)が焼土壙出土遺物である。(38)は器種を断定出来ないが、大型の鉢の底部の可能性もあるが、とりあえず甕としておく。底径16.8cmを測り、外面と底面はハケ整形がなされている。完形品が1点もないことから、全体像をつかめる土器がないことが惜しまれる。

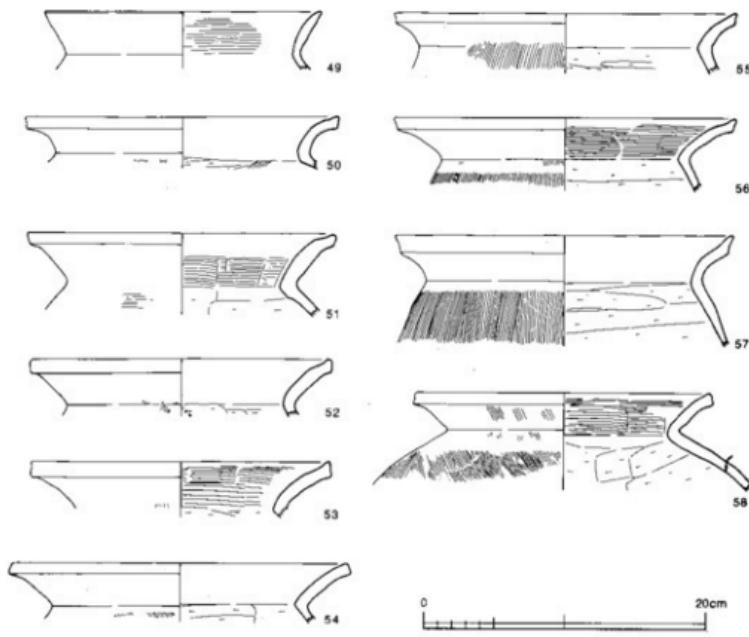
口縁部を中心に分けてみると、プロボーションからは直線的に延びるものと湾曲しながら延びるものに分類出来る。また端部の形状からは、①角張るもの ②丸く尖りぎみになるもの ③外面に肥厚するもの ④内面に肥厚するもの ⑤内外面に肥厚するもの ⑥内面に大きくなきあげるもの の6タイプに分類出来る。⑥は古墳時代の可能性が残されている甕である。量的には④内面に肥厚するものが多いが、時期差などを表すものではないと思われる。



第21図 土器実測図(2) (焼土壙出土)



第22図 土師器実測図(3) (焼土壙出土)



第23図 土器実測図(4)

技法的には、ほとんど同じ作りである。ユビ成形ののち、内面はヘラケズリを行ない口縁部のみハケ整形するものが多い。その後端部はヨコナデで仕上げられている。外面はハケ整形が施されている。(33)のようにハケ整形ののちに頸部下に凹線が見られるものもある。

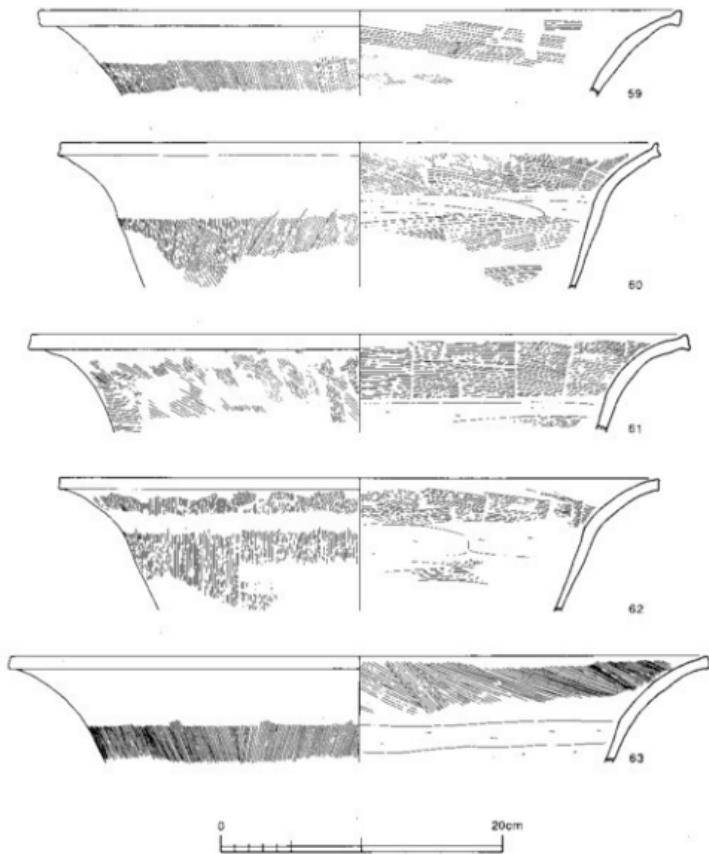
口径は、21~24cmのものが多い。最も径の大きいものは(40)で32.8cmを測る。

#### 鍋 [(41)~(48)(59)~(63)]

鍋も遺構の内外から出土しているが、遺構内出土の方が量が多い。口径の大きいもので、口縁部だけのものは鍋として扱っている。大型の甕が含まれている可能性は十分にある。

最も口径の小さいものは(41)で42.4cmを測る。逆に最も口径の大きいものは(48)で52.4cmを測る。底部まで残っているものはない。

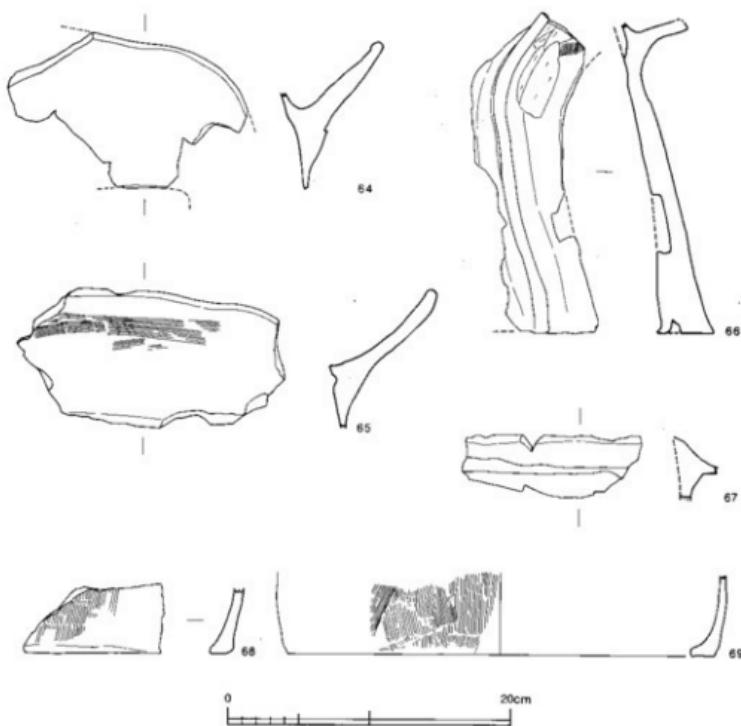
成形技法は、ほとんど同じである。ユビ成形ののち、内面はヘラケズリ、外面はハケ整形を行っている。そのちに、口縁部を作り出した上で、(46)を代表に頸部に指頭圧痕が明瞭に観察される。また、頸部をなでることによって(42)(65)などはハケ整形が消されている。内面はヘラケズリののちハケ整形が行われているものもある。口縁部内面は横方向か斜め方向のハ



第 24 図 土 師 器 実 測 図 (5)

ケ整形が施されている。端部のみヨコナデで仕上げている。粘土の継ぎ目が明らかなものも認められる。ハケ原体は使い分けているものが多く、内面の方が細かいハケを使用している。

口縁端部は甕と同じく幾つかに分けることが出来る。内外面に僅かに肥厚するものが多い。(44)のように口唇面に凹線が見られるものもある。凹線ほどではないが、端面が窪んでいるものが多く認められる。



第25図 實測図

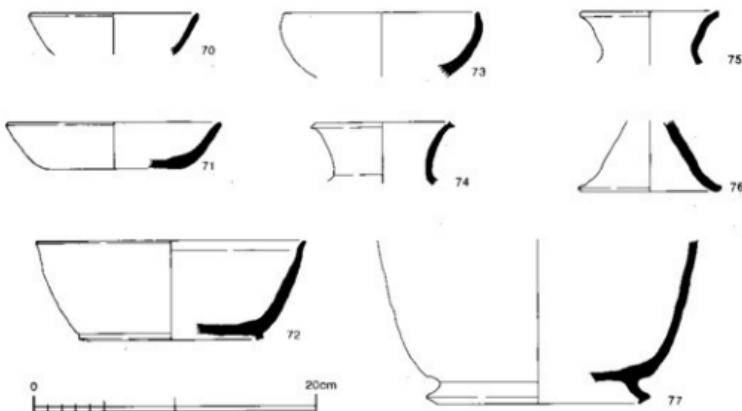
竈 [(64)～(69)]

全体像をつかめるものは出土していない。他にも図化していないが数点竈と断定出来る破片は出土している。すべて焼土壙出土遺物である。

全体的にユビ成形で形作ったのち錫を付加している。錫を付けるのもユビによっている。内面はハラケズリを行っている。内外面ともにハケ整形で仕上げている。堰部の形状から3個体以上は保有していたものと考えられる。焼成は良好で、色調は赤褐色である。胎土は全体的に緻密であるが3mm前後の小石粒を含んでいる。

②須恵器 [(70)～(97)]

須恵器も造構の内外から出土している。量的には造構外の方から多く出土している。器種は杯・壺・高杯・甕がある。



第26図 須恵器実測図(1) (焼土壙出土)

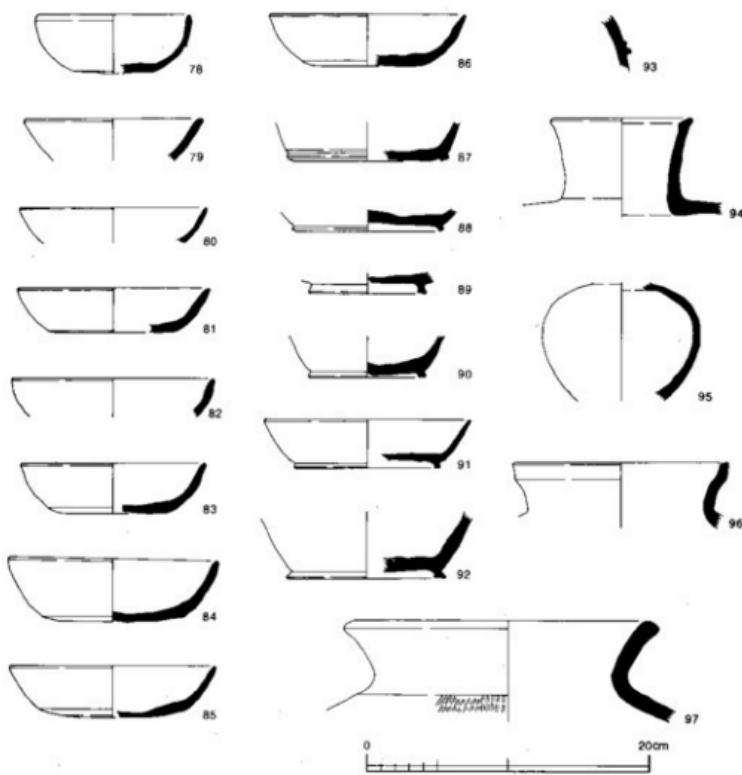
杯 ((70)~(73)(78)~(91))

杯も遺構内外で出土している。大きく高台の有無で分けられる。図化した中では高台の有るもの6点、ないもの12点と高台のない方が多い。

全般的にロクロナデによって作られている。高台は、すべて輪高台で外方へ踏ん張りぎみのしっかりした高台が多く、退化した高台は(87)だけである。杯部の浅い(91)と深い(72)の两者がある。(72)は端部近くをロクロナデによって外湾させており、内側に不明瞭な稜を持つ。高台の形態の違いからは、時期的に古い段階のものが多いことなどが示しているのであろう。高台のないタイプには直線的に延び罐部が丸くおさまる(70)(71)(79)などを、器種も鉢として良いような内湾する(73)(78)と、緩やかに湾曲しながら端部を丸くおさめる(84)と、やや直立ぎみになる(82)に分けられよう。

壺 ((74)(75)(77)(92)~(96))

壺で図化したものは8点である。口縁部が4点、底部が2点、胴部が2点である。口縁部の4点はともに中型のものである。(74)は全体に灰を被っており、口径9.5cmで丁寧なつくりである。端部は内外面に肥厚している。(75)も(74)と同じタイプの壺である。(94)は直口壺の口縁部で、やや大型になるかもしれない。胴部内面にタタキの痕跡が残るが磨滅のため明瞭でない。外面には自然釉が付いている。(96)は口径13.1cmを測り、端部手前で直立している。外面には平行タタキが残っている。底部はやや大型のもので、(77)は底径14.3cm、最大腹径22.6cmを測る。長石の石粒を含んでいる。(93)は突帯壺の胴部で突帯部分である。2条の細い突帯でやはり自然釉が外面に付着している。



第27図 須恵器実測図(2)

**高杯 [(76)]**

高杯は脚部の破片が1点だけである。口径9.2cmを測り、ロクロナデで仕上げている。端部はやや外開きぎみである。

**甕 [(97)]**

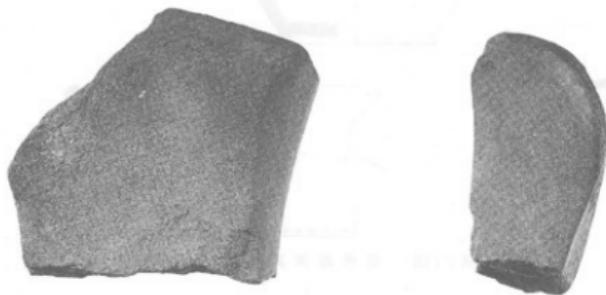
中型甕の口縁部である。口径19.6cm、残存高7.2cmを測る。胴部は内外面ともタタキによつて整形されており、内面は格子、外面は平行のタタキである。自然釉が外面に付着している。

③砥石 [(98)]

砥石が1点だけ遺構肩部から出土している。3面に擦り面が認められる。端部は欠損している。幅13.2cmで残存長12.3cmである。通有の砥石(中砥)である。



第28図 砥石実測図



第29図 砥石

## V. おわりに

浪滝遺跡の調査は、確認調査と一部全面調査を合わせても10日にも満たない6日間の調査であったが、それなりの成果を挙げたものと思われる。調査面積も85m<sup>2</sup>と対象面積の少ない調査であった。調査期間中は初夏の光りの現れ始めた暑い毎日であった。その中で作業に参加戴いた方々、ならびに関係機関とその担当者の方々には多大な協力を得た。感謝の念に堪えません。

調査の結果、検出した遺構は焼土壙1基だけである。そして出土遺物も遺構内からが大半であった。しかし、下層から時代の潮の土器が出土しており、当遺跡が前代から利用されていたことが窺われる。浪滝遺跡は、地形変換線上に立地していることから、遺跡範囲も限られたものになろうと思われる。個々について僅かではあるが、現在判ったことを記し、おわりにとしたい。

遺跡の立地は、地形変換線上である。地目は水田と畠であった。調査段階では段差のある圃場であったが、本来は斜面であったようである。確認調査のトレンチでも北側では神鍋山から流れている溶岩の岩盤が現れている。また、西側では弥生時代前期と古墳時代の前期の土器が少量出土しているものの、遺構面としては確認されていない。東側は尾根が延びており、遺跡は広がることはない。遺跡の三方向は今回調査した範囲に限られていることだろう。南方向に限って遺跡が広がっている可能性が考えられる。ただ、尾根沿いには小さな谷があり、遺跡が広がるとすれば、谷部を除いた南から南西方向の狭い範囲しか考えられない。しかし、現状では南北部分は工場の水溜のブルーがあることから、残存していないと思われる。遺跡が広がって、しかも残っている部分は南側5mくらいの小地域だけであろう。

検出遺構は焼土壙1基だけである。時期は奈良時代の遺構である。平面プランは隅円の長方形で、断面も舟底状を呈しており、弥生時代の屋外炉に酷似している。奈良時代の遺構としては検出例の少ない遺構であろう。この時期に焼成遺構として報告されているものとは異なっている。壙内から須恵器と土師器が出土していることから、焼成遺構と相違するのは明らかである。出土遺物は土師器の方が量的に多い。器種では甕・鍋が多く、甕も出土していることが、遺構の性格を示すものかと思われる。屋外炉か、それに近いものと考えるのが妥当であろう。ただ、周囲に生活遺跡が広がる可能性が少ないと、屋外炉を保持する必要性があるものかと疑問を抱く。

出土遺物では、弥生時代前期の土器が注目される。遺構は伴わず、出土量も少量である。図化した点数も10点と僅かである。器種も壺・甕と一般的なもので、特に土器に特筆すべき特性は持っていない。日高町内においても神鍋山遺跡や福布ケ森西遺跡で出土している。最近但馬全域でも増加しているとは言え、まだまだ前期の遺跡は数少ない遺跡である。土器は前期でも

終わりの段階の土器である。神鍋山遺跡では突帯文土器も出土しているが、浪滝遺跡では出土していない。円山川下流の豊岡市から上流の朝来郡まで前期の遺跡は認められ、支流の大屋川・八木川・出石川流域にも前期の遺跡は存在している。稲葉川でも上流の神鍋山遺跡が立地することから前期末の段階では但馬のはとんどの地域に弥生文化が広がっていたことが想定される。浪滝遺跡周辺でも今後遺跡は増加するものと予測される。現時点において、浪滝遺跡の前期の土器の出土は弥生文化導入を考える上に貴重な資料と思われる。

古墳時代初頭の土器も若干出土している。同じ谷の西側の久田谷遺跡や尾根を越えた東側の福布ヶ森西遺跡・福布ヶ森東遺跡で多量の土器が出土しており、浪滝遺跡周辺でも活動していたことが判る。土器の中には搬入品ではなく、山陰地域の特徴である端部をつまみあげて肥厚させた甕が出土している。次の時期になる布留系の甕も1点含まれている。

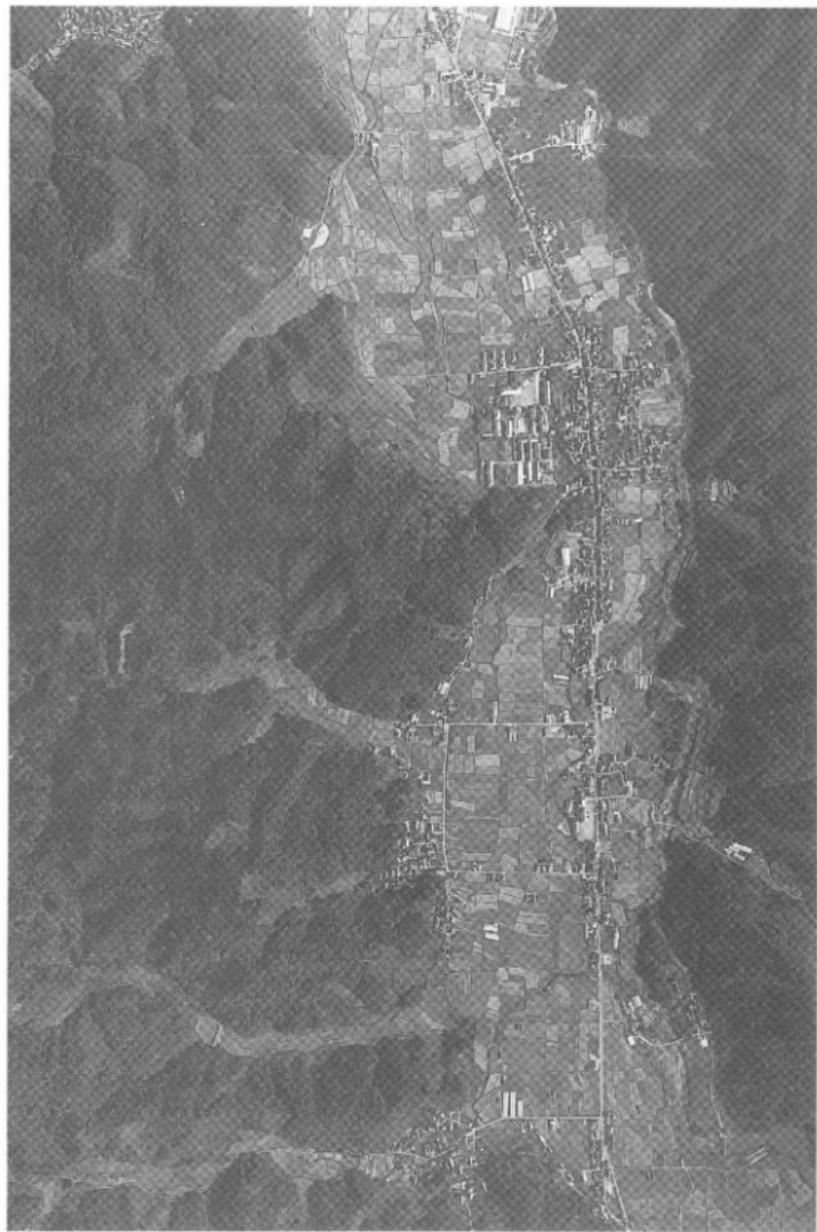
奈良時代の遺物は須恵器・土師器・砥石である。日常使用する遺物が出土しており、生活に密接した遺跡であろうと想像される。大型の甕・鍋が多いことは指摘出来る。甕が出土しており、検出遺構が焼土壙であることも火に強く関連することが判る。ただ、遺跡範囲が狭く、この規模の焼土壙を保有していることは特殊であると言える。集落の一部であれば通有の在り方であろうが、遺跡面積が小さいことから疑義を感じる。これが遺跡の性格を現すのであれば、特殊な遺跡であると言えよう。母集落も離れているようであるならば、特殊な性格を持った遺跡と考えられる。立地条件も良好とは思われないことも一般集落でないとの傍証となろうかと思われる。

小面積で短期間の調査ではあったが、幾つかの問題点を内包していることが判った。浪滝遺跡は不時発見の遺跡であり、工事中であったが、関係各位の協力の元で調査を行えたのは幸いであった。遺跡を発見し、また調査にも参加戴いた井垣慶一氏には感謝致します。また、発掘調査・整理調査を通して協力戴いた方々や、教示戴いた方々に感謝致します。



第30回 浪滝遺跡の現況

# 図 版



浪花遺跡周辺空中写真（国土地理院撮影）



浪滝遺跡遠景



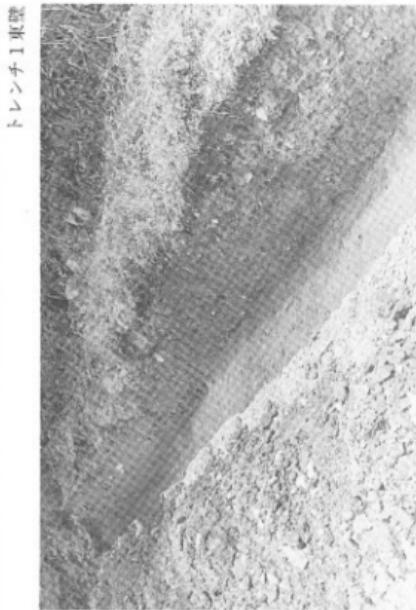
浪滝遺跡全景



浪滝遺跡遠景(東から)



調査区全景

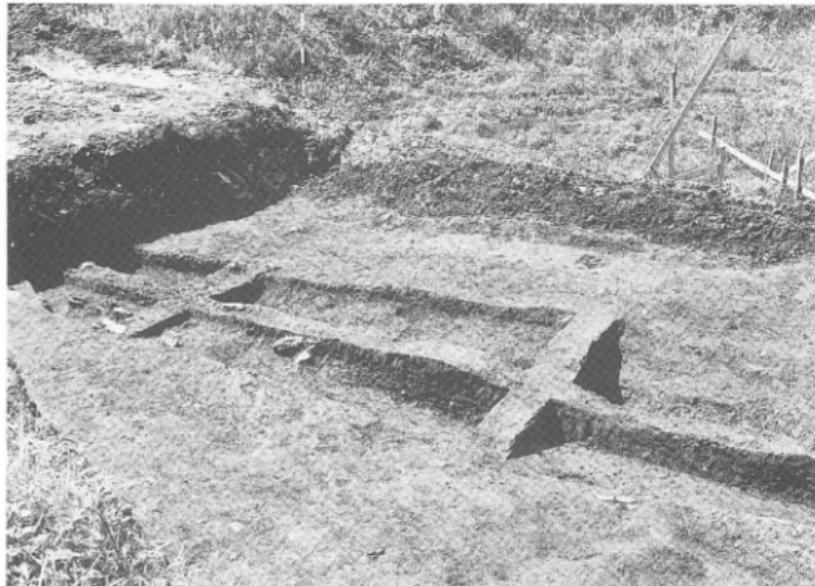


トレンチ 2 北壁

確認調査地全景

トレンチ 1 東壁

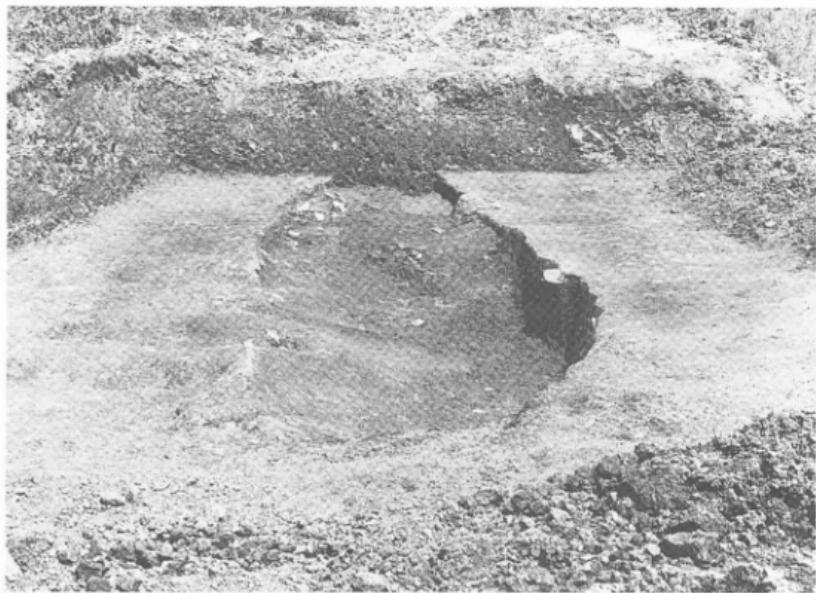
トレンチ 1 東壁



焼土堆断面



焼土堆上器出土状態



燒土壘全景



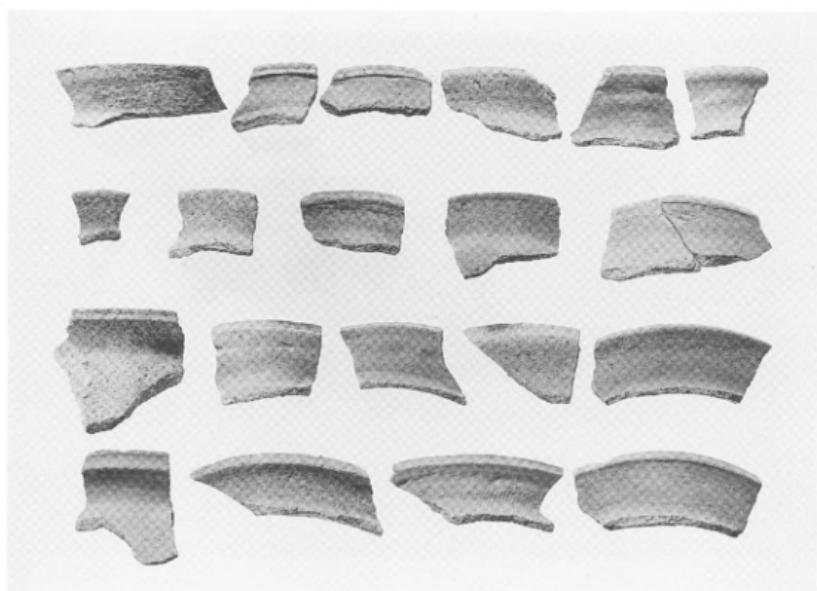
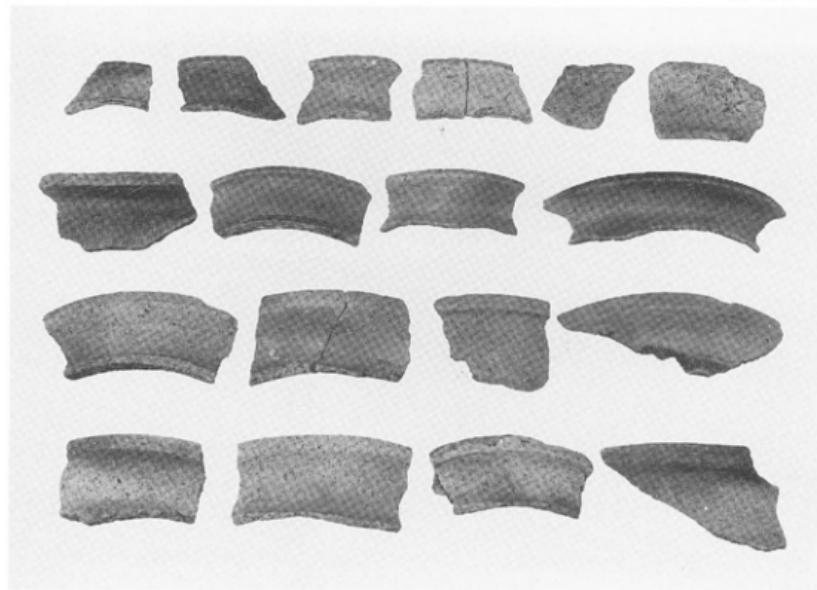
燒土壘全景



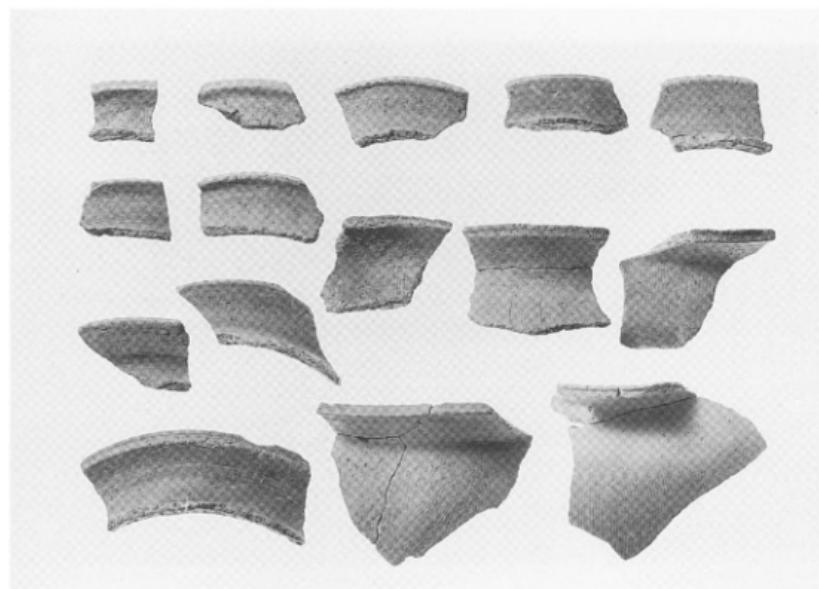
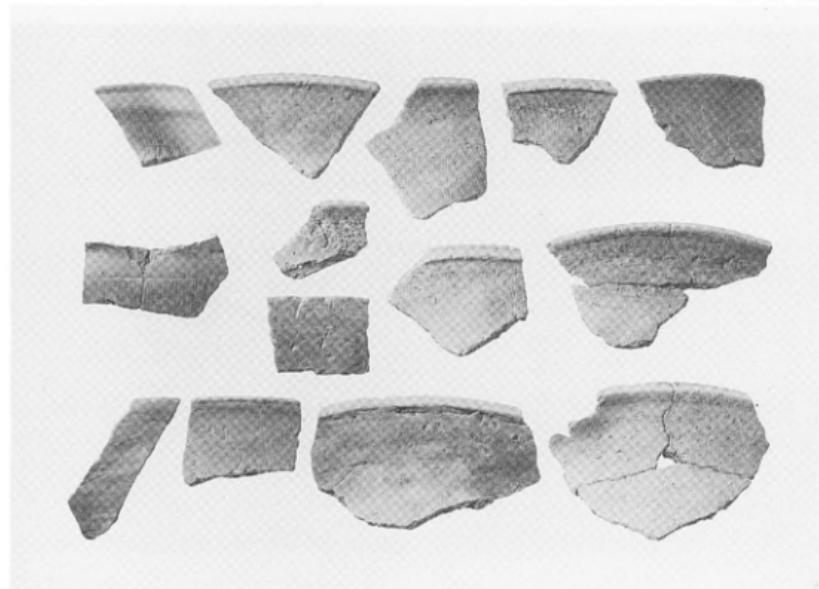
弥生前期の土器



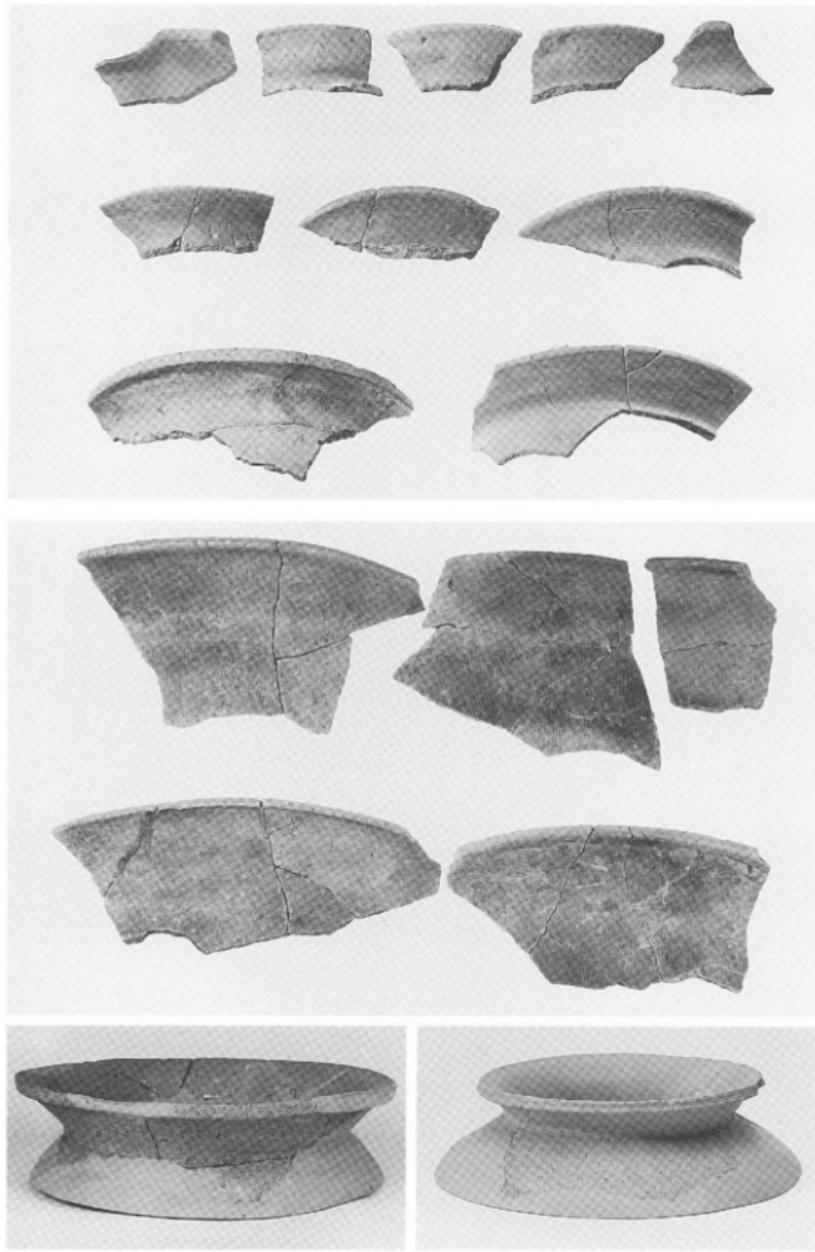
確認調査出土土器



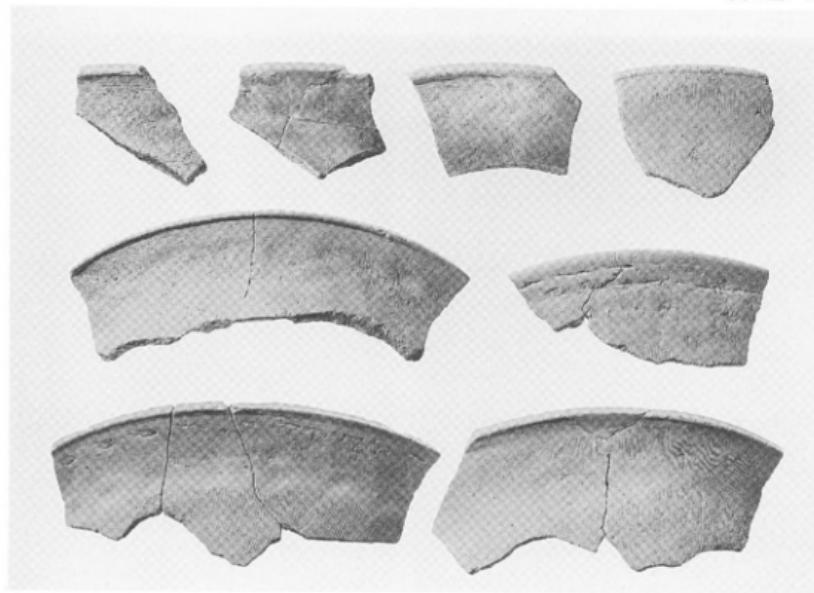
出土土師器 (1)



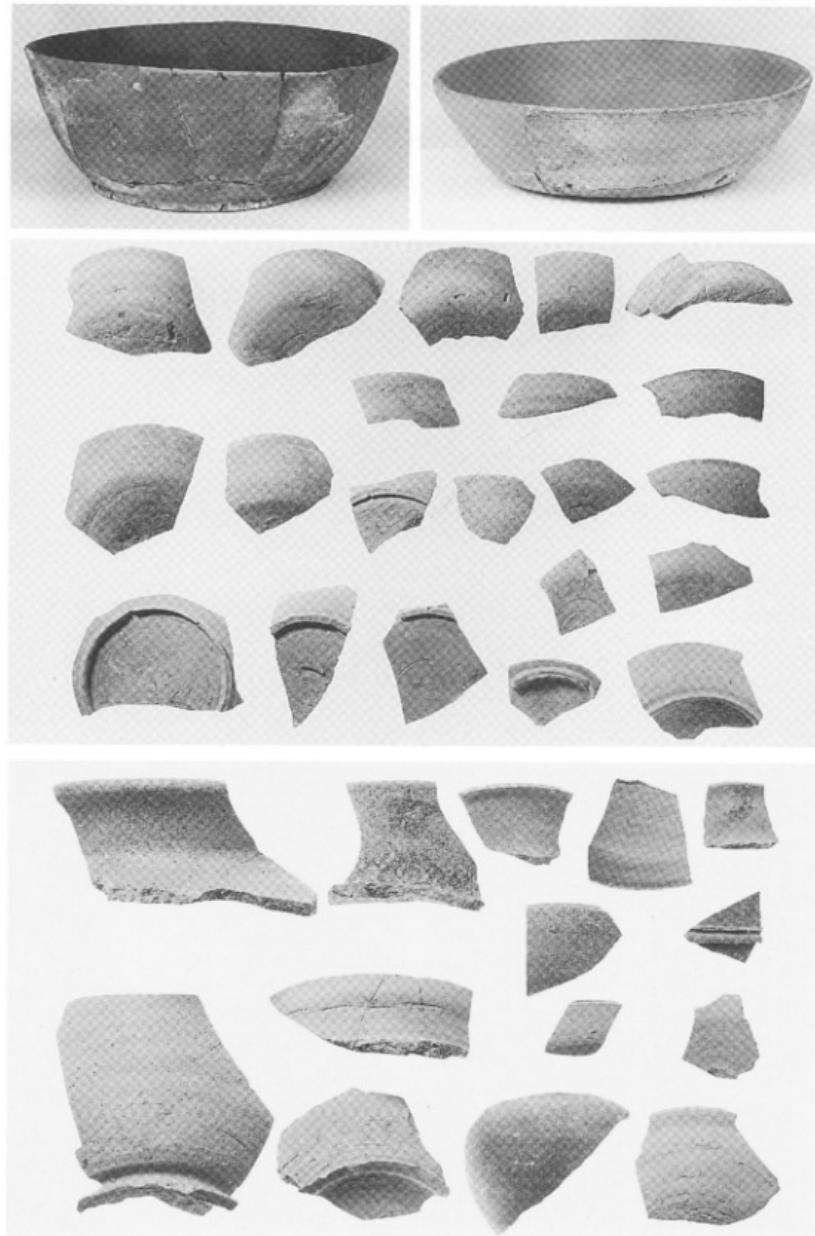
出土土師器 (2)



出土土師器 (3)



出土土師器 (4)



出土須恵器

---

兵庫県文化財調査報告 第80冊  
1990年3月30日 発行

## 浪 滝 遺 跡

編集 兵庫県埋蔵文化財調査事務所  
〒652 神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5  
TEL (078) 531-7011

発行 兵庫県教育委員会  
〒650 神戸市中央区下山手通5丁目10-1  
TEL (078) 341-7711

印刷 株式会社 旭成社  
〒651 神戸市中央区二宮町1丁目2-7  
TEL (078) 222-5800

---